

「藝術新聞」目錄

——自第一五一号至第三七二号（不揃）

山内祥史

## Summary

### Bibliography of *Geijutsu Shinbun*

Shōshi Yamanouchi

*Bungei-jihō* (*The Literary Review*) published its first issue on November 20, 1925. Although it concerned itself only with the literary world at the beginning, by and by it extended the subjects it covered to include world-wide art such as painting, music, drama, movies and other artistic publications as well as literature. It was published semi-monthly until No. 150 (December 27, 1930) and then as a weekly review.

The bibliography below is from *Geijutsu Shinbun* (*The Art Newspaper*) which was originally *Bungei-jihō*. It lists signed articles which appeared in *Geijutsu Shinbun* from No.151 (January 1, 1931) to No. 372 (November 27, 1937). I have listed these with the hope that all of the back numbers will be found someday.

かつて『文藝時報』目録―自十一号至百五十号（不揃）』（神戸女学院大学論集）第三卷第三号、一九七七年三月一五日発行）と題する拙稿を発表したことがある。その稿は、のち、拙著『日本近代文藝考』（双文社出版、一九八三年六月一五日発行）に補訂して収録した。さらに、そののち、『文藝時報』全号が複製され、同時に『文藝時報』解題・総目次・索引』（不二出版、一九八七年二月一〇日発行）も発行されて、所期の目的を達することができた。

却説、すでに『文藝時報』解題・総目次・索引』所掲の拙稿「解題」でも触れたように、「文藝時報」第一五〇号（一九三〇年二月二七日発行）に、つぎのような「社告」が掲げられている。

創刊七年、来る新年を期して、本紙として空前の飛躍を試みる計画であります。内容の面目を一新し、単に面白き新聞といふに止まらず、藝術全般に亘り、常備必須の有用な新聞とする計画であります。／就ては、「文藝時報」の文藝の字義は、宏く文学、藝術の意を以て用ゐたのでありますが、世間動もすれば単に文学関係のものゝみと解し、其他の藝術には、比較的縁薄きが如くに思はるゝ傾きがありました。輒ち茲に、本紙空前の内容刷新を機とし、全藝術界に通ずる唯一の機関としての使命を如実に示す名称を選び、来る新年より「藝術新聞」と改題することにしました。

かくして、「文藝時報」の号数を継承し、一九三二年一月一日発行の第一五一号から、紙名のみを改めて発行したのが、「藝術新聞」である。こののち、「藝術新聞」は、第五四三号まで発行して、一旦休刊したようだ。しかし、その号が、何年何月何日の発行か、現在不明である。さらに、

再刊された「藝術新聞」は、すでに青山毅氏が「〈藝術新聞〉細目」（ブックエンド通信）通巻第七号・一九八二年二月一五日発行）で紹介されたように、一九四一年二月一三日発行の第五四四号から一九四二年二月二六日発行の第五九八号まで発行が確認されている。そのあとの発行状況は、現在不明だ。

本稿では、このうち、まだ内容があきらかにされていない、一九三一年一月一日発行の第一五一号から一九三七年一月二七日発行の第三七二号までの内容を紹介する。ただし、一二五七面にわたるその記事の総てを紹介すると、膨大な量となるため、ここでは署名のある文章に限定して紹介することにした。

却説、「藝術新聞」第一五一号の奥付には、つぎのように記されている。

週刊 木曜日発行／定価一部金五銭／十週分送料共五十五銭／三十週分同一円四十銭／六十五週分同金三円／郵券代用は一割増の事／発行編輯兼印刷人多恵文雄／発行所 東京市小石川区林町二文藝時報社／電話小石川一三九五番／振替東京七三七七九番

第一五二号以後の主な変更点を指摘しておく、つぎのようになる。

まず、一九三一年二月一〇日発行の第一七二号から、「発行編輯兼印刷人」が「多恵暉雄」、発行所住所が「東京市外西果鴨二八四七」となり、ついで、一九三二年一月三日発行の第一九三号から、発行所住所が「東京市豊島区西果鴨二丁目一八四七」となり、さらに、一九三五年二月二日発行の第二五〇号から「毎土曜日発行」となっている。

以下、目録を掲示しておく。

第百五十一号 昭和六年一月一日発行 三十二面

所謂暴露文学の形式(一)

暹羅美術展に就て

五九郎と洋文

猿之助松竹脱退其他

主観と客観

エロナンセンス『女給日記』が出版される

未成年生の芸人

「真理の春」裏面話

左翼劇場の「炭塵」(ガス)

トランクを前にして

干支に因んで(一)——蘇武と黄初平の話

第百五十二号(欠)

第百五十三号 昭和六年二月五日発行

シラノを上演するに当りて

第百五十四号 昭和六年二月十二日発行

日本の踊

個展開催に就て

令煌社に就いて——主催者としての感想——

独立美術展を観る

第百五十五号 昭和六年三月五日発行

階級藝術に就て

独立美術展を観る(二)

映画批評——スクーリンの匂ひ

第百五十六号 昭和六年三月一九日発行

感想三つ

第百五十七号 昭和六年三月二十六日発行

日本画会への出品

観山遺作展を観て

江戸画壇の権威谷文晁先生に就いて

第百五十八号 昭和六年四月十六日発行

最近輸入映画の傾向

劇画協会に就いて

第百五十九号 昭和六年四月廿三日発行

我個展に就いて

土着の作家と地方出の作家

最近輸入映画の傾向

八面

伊東 深水 一

豊田 豊 四

ホー・ジマク 五

四面

小茂田青樹 一

四面

荒木 十畝 一

野田 九浦 一

佐竹 水陵 一

四面

森 岩雄 一

鳥居 清忠 一

四面

速水 御舟 一

案本 一洋 一

森 岩雄 一

第百六十号 昭和六年五月七日発行

四面

塾展開催に就て

松林 桂目 一

所謂大衆文藝の行衛

平山 蘆江 一

九州の旅

高木保之助 一

革丙会展に就いて

棚田 曉山 一

第一美術展に就いて

深沢 省三 六

最近の劇作家達

関口 次郎 一

菊地塾展と青甲社展

豊田 豊 七

叔父に寄す―倉田白羊個人展覧会にて

大熊長次郎 三

若葉旅信―北支部より(二)

小早川秋声 七

映画批評―映写幕の匂ひ

ホー・ジマク 三

浄瑠璃界近事

豊竹巖太夫 八

第百六十一号 昭和六年五月十四日発行

八面

第百六十四号 昭和六年七月九日発行 八面

彫塑屋外陳列の提唱

朝倉 文夫 一

第二文藝家協会論

尾崎 士郎 一

藝術家の生活

伊東 深水 一

鑑賞藝術に就て

川合 玉堂 一

新古典主義

中河 与一 一

今村紫紅の想出

速水 御舟 一

所謂大衆文藝の行衛

平山 蘆江 一

文壇官吏減俸論

上 司 小 劍 三

大学講筵の舞台

十菱 愛彦 六

二つの塾展

近松 秋江 三

「街のルンペン」を観る

辻本浩太郎 七

二つの塾展

青柳 有美 三

第百六十二号 昭和六年五月廿八日発行

八面

第百六十五号 昭和六年八月六日発行 八面

自壊せんとする文藝家協会

長田 幹彦 一

独逸より歸りて

小室 翠雲 一

分裂両派声明書抜粹

労農藝術家聯盟 三

佇ち止った姿

龍膽寺 雄 一

全国の労働者農民諸君に檄す

第二『文戦』打倒同盟 三

朝鮮風景と我個展

池上 秀畝 一

若葉旅信―北支那より(一)

小早川秋声 五

新劇運動者の夢

浅野 歳郎 六

第百六十三号 昭和六年六月十一日発行

十面

京都の二個展

豊田 豊 八

たねとり物語

長谷川 伸 一

第百六十六号 昭和六年九月三日発行 六面

画人の心境

支那画小感

歌人協会デモ

芦江氏に抗議(一)

青龍社展を鑑る

松林 桂月 一

川北 霞峰 一

尾山篤二郎 一

平野 止夫 二

阿中 士行 四

シヤム展に就て

シヤム展由来記

シヤム展の行を送る

芦江氏に抗議(三)

現代の音楽

日本歌謡の夕

荒木 十畝 三

卯木 生 三

豊田 豊 三

平野 止夫 六

三瀨 牧子 七

F 生 七

第百六十七号 昭和六年九月十日発行 十面

今年の二科展

院展を鑑る(一)

院展の彫刻

二科展評

二科・院展小感

芦江氏に抗議(二)

石井 柏亭 一

北 耀 星 二

神田 素彦 二

中村三太郎 三

豊田 豊 三

平野 止夫 六

第百七十号 昭和六年十一月十二日発行 十面

帝展の日本画

帝展洋画概評(一)

『風の街』を評す

第百七十一号 昭和六年十一月六日発行 八面

五十年の回顧

批評の真に就て

帝展の日本画(二)

創作概評(十一月)

帝展洋画概評(二)

音楽嗜好会合唱を評す

抗議一束

紫明 樓 一

豊田 豊 三

新井 徹 七

小川 未明 一

勝田 蕉琴 一

紫明 樓 一

藤間津奈雄 三

豊田 豊 四

今 了一 四

加藤 武雄 八

小林 鷺里 八

第百六十九号 昭和六年十月十五日発行 十面

小堀先生の思出

死に面せる父

安田 鞆彦 一

小堀 安雄 一

第百七十二号 昭和六年十二月十日発行 八面

一九三一年度の文壇概観

七絃会鑑堂

東洋音楽学校の演奏会を聴く

第七十三号 昭和七年一月一日発行 三十二面

文壇喫煙漫語第一回

創作批評 十二月

一九三二年の文壇は？

明治神宮絵画館を観る―新春参拝者のために―

シヤム展開会式概況

雪と新潟(短歌)

32年の動向を探る/新年号雑誌評(寄贈図書の中より)大岩 透 二

映画学の提唱

暮から春まで/外国映画寸評

暮から春まで/日本映画寸評

干支と川柳/猿・秀吉

干支と絵/絵画に現れた猿

十三人倶楽部総動員

月に弾かせる音楽(詩)

アオゾラ貯金箱

金三両(一幕)

インテリ労働者

藤間津奈夫 二

豊田 豊 三

今 了一 四

武野 藤介 二

藤間津奈雄 三

大津 三郎 四

豊田 豊 七

西沢 笛畝 九

小泉 荻三 二〇

長田 幹彦 三

アナ・トホル 三

アナ・トホル 三

天野 下鷹 五

猿丸 太夫 五

内田虎之助 六

丸茂 安雄 六

ホー・ジマク 六

豊田 豊 七

藤間津奈雄 七

第七十四号 昭和七年一月八日発行 十面

帝展改造私案

三宅さんと私

文壇喫煙漫語第二回

猿の古歌謡(上)

暹羅日本美術展第二報

第七十五号 昭和七年二月十八日発行 四面

見たもの聴いたもの

欧洲ところ／＼

六潮会展を評す

第七十六号 昭和七年二月廿五日発行 八面

プロレタリアート・ロマンと新社会派ロマン

シヤムの絵話

文壇喫煙漫語第三回

欧洲ところ／＼(二)

第七十七号、第七十九号(欠)

第八十号 昭和七年五月十二日発行 八面

レビューに就いて

第十一回南画院展評

雅楽同志協会公演第十四回を観る

伊東 深水 一

中河 幹子 二

武野 藤介 二

中島 悦次 三

西沢 笛畝 五

楠田 敏郎 一

久保田金僊 一

豊田 豊 二

正富 汪洋 一

西沢 笛畝 一

武野 藤介 二

久保田金僊 四

龍膽寺 雄 一

豊田 豊 四

穎田 島生 六

アベル・ガンス作／ナポレオンを観る

ホー・ジマク 六

女房お町頭が高い

国定 忠次 五

第百八十一号 昭和七年六月二日発行

十面

山内多門君に対する思出

飛田 周山 二

故人の思出／荅峰断片

平山 蘆江 一

文壇喫煙漫語第四回

武野 藤介 三

過去の巨将『佐藤春夫』を誅す(1)

龍野 徹 二

映画批評／日活トーキー／征空大襲撃

ホー・ジマク 四

映画批評／パラマウント全発声／『その夜』

ホー・ジマク 三

龍子個展を観る

豊田 豊 五

第百八十八号 昭和七年九月一日発行

四面

第百八十二号(欠)

第百八十三号 昭和七年六月三十日発行

八面

ムーランルージュの脚の魅力打診

ホー・ジマク 五

国粹主義者になった話  
過去の巨将『佐藤春夫』を評す(2)  
映画批評／佛オッソ全発声／プレジヤンの船唄

真道 黎明 一  
龍野 徹 二  
ホー・ジマク 三

新写真派とは如何なるグループか？

今口 憲一 六

京都塾展の三作

豊田 豊 六

第百八十九号(欠)  
第百九十一号 昭和七年十月六日発行

四面

第百八十四号 昭和七年七月七日発行

四面

第百九十二号(欠)  
第百九十三号 昭和七年十一月三日発行

八面

第百八十五号 昭和七年七月廿八日発行

二面

屑七と誤六の対話／院展の諸作―三―

底野 鱧三 一

作品短評『幼き合唱』

龍野 徹 六

新会員に推された松林桂月氏

一 隅生 七

不況とトーキー企業

六面

森 岩雄 一

新写真派とは如何なるグループか？

今口 憲一 四

映画批評／千恵蔵トーキー／『旅は青空』

ホー・ジマク 五

寿美蔵腰が弱いぞ

弓矢 太郎 五

第百九十四号 昭和七年十一月十七日発行  
帝展の作―屑七と誤六の対話

底野 鱧三 一



巴里美術界の興味ある挿話二三

シャ・ノアール 二

文学時評

龍野 徹 二

帝展第一部の傑作に就いて

豊田 豊 三

映画批評／「幻の小夜曲」「ロイドの活動狂」「悪魔と深海」

ホー・デマク 四

第百九十五号 昭和七年十二月十四日発行 六面

帝展の作(二)―屑七と誤六の対話

底野 鱧 三 一

映画批評／『吸血鬼』『怪物団』『十仙ダンス』

ホー・デマク 三

第百九十六号(欠)

第百九十七号 昭和八年二月二十六日発行 二面

第百九十八号 昭和八年二月十六日発行 六面

映画批評

ホー・デマク 四

第百九十九号 昭和八年三月二日発行 八面

第二百号 昭和八年三月二十三日発行 八面

SCREEN VIEW

ホー・デマク 七

第二百一号(欠)

第二百二号 昭和八年四月十三日発行 六面

最近日本画壇への一考察

夜霧(創作)

豊田 豊 四  
川村 信 六

第二百三号 昭和八年四月二十七日発行 六面

SCREEN VIEW

踊子の脚(創作)

「くさふぢ」読後

「茜草」の今井さん

ホー・デマク 三

藤平 文彦 五

松下 英麿 五

福田 栄一 五

第二百四号 昭和八年五月十一日発行 八面

第一回公演テアトル・コメディを観る

マダムの礼節他三篇(創作)

我々の茶話会について

龍野 徹 五

川村 信 七

津田 青楓 七

第二百五号(欠)

第二百六号 昭和八年六月二十九日発行 八面

第二百七号(欠)

第二百八号 昭和八年七月二十七日発行 十面

故春拳画伯を憶ふ(一)

春拳氏の人格

春拳画伯の傑れた技法

人面としての一面

川合 玉堂 一

菊池 契月 一

上村 松園 一

幼時から受けた強い印象

深い喜びをされた人

文相の弔辞

翠嶂画伯の弔辞

門人総代の弔辞

映画評論(1)オリヂナル物可否論

西村 五雲 一  
榊原 紫峰 一  
鳩山 一郎 二  
西山卯三郎 二  
岡 文濤 二  
兼子 慶雄 九

第二百九号 昭和八年八月二十四日発行

八面

春拳画伯を憶ふ(二)

春拳氏追弔

驚くべき筆力と早成

雪に就ての教訓

嚴父と慈母を一時に失ふ

映画評論(2)『オリヂナル物可否論』

荒木 十畝 一  
富田 溪仙 一  
福田平八郎 一  
川村 曼舟 一  
兼子 慶雄 七

第二百十号 昭和八年九月二十一日発行

八面

恩師追慕録(二)

青樹画伯を憶ふ―親しみ深い人

自力で今まで

亡友古賀春江君

早苗会同人有志 一  
富取 風堂 三  
田中 文雄 三  
東郷 青児 五

第二百十一号〜第二百十五号(欠)  
第二百十六号 昭和八年十二月十四日発行 四面

第二百十七号 昭和八年十二月廿一日発行 四面

文壇小景

明治座の師走興行―ハムレット等を見る

T N 生 二  
渡 辺 三

第二百十八号 昭和九年一月四日発行 三十二面

迎春の辞

藝壇小景

言葉

謹謝

日本文学への苦言

演劇今昔感―翻訳劇の悪評など

編輯同人譜

不運連続

戯れ書

車内の出来事

或る医者

出版界親玉私観

年頭に際し松竹日活両社に告ぐ

第二百十九号 昭和九年一月廿五日発行 八面

弔辞(山田敬中画伯)

稜 人 一  
T . N 三  
M 生 四  
多恵 文雄 九  
宮浦 凌二 五  
(宮浦) 云  
榎本 武治 六  
宮浦 凌二 六  
小沢 正一 元  
渡辺 良助 三  
夏目 忠夫 三  
渡辺 良助 三  
金子堅太郎 三

弔辞

最近の京都画壇―竹杖会解散と栖鳳翁―

映画時評／無声映画と発声映画について／…チャリヘサヨナラ…

機関銃

結城 素明 三

豊田 豊 三

原 秀夫 六

張作林 七

書死した直木氏を敬ふ

惜しいと思ふ

機関銃

「討入曾我」は愚作―新橋演舞場の新国劇―

大下宇院児 四

江戸川乱歩 四

張作林 六

渡辺 良助 七

第二百二十号 昭和九年二月八日発行 八面

講談社と野間清治

舞踊の世界へ…舞踊、レヴユウ、エノケン。

花園について（詩）

夏目 忠夫 五

深川 秀邦 六

林 光則 六

第二百廿四号 昭和九年三月廿二日発行 八面

第二回春の青龍社展

豊田 豊 三

第二百廿一号 昭和九年二月廿二日発行 八面

三越の院同人展／附・小川翠村君の個展

弔辞（佐々木味津三）

弔辞

弔辞

新潮社内幕話

機関銃

「燕」その他の新作―東劇の力演を観る―

豊田 豊 二

横田 秀雄 三

津村 卓男 三

沖野岩三郎 三

夏目 忠夫 五

張作林 六

渡辺 良助 七

第二百廿六号 昭和九年四月五日発行 八面

機関銃

張作林 七

第二百廿七号 昭和九年四月十九日発行 八面

青々会の六曲展

豊田 豊 二

機関銃

張作林 七

第二百廿八号 昭和九年五月三日発行 二面

第二百廿二号 昭和九年三月八日発行 八面

直木の死は感慨無量だ

直木氏の死

広津 和郎 四

岡田 三郎 四

第二百廿九号 昭和九年五月十日発行 八面

京都綜合展の問題―日本画の墨画的転向―

豊田 豊 三

文壇小景  
機関銃

T・N 五  
張作林 七

寄贈誌寸見

T・E 生 八

第二百廿号 昭和九年五月廿四日発行 二面

第二百廿七号(欠)

第二百卅八号 昭和九年八月卅日発行 八面

第二百卅一号 昭和九年五月卅一日発行 八面

第二百卅九号 昭和九年九月六日発行 二面

新潮社内幕話2

夏目 忠夫 五

第二百四十号 昭和九年九月十三日発行 八面

第二百卅二号 昭和九年六月七日発行 二面

青龍展と明朗展

豊田 豊 八

第二百卅三号 昭和六年六月十四日発行 八面

第二百四十一号(欠)

淡交会展評

富士田 郷 三

第二百四十二号 昭和九年十月十一日発行 八面

読画会展評

豊田 豊 三

院展を評す

板橋 山人 三

第二百卅四号 昭和九年六月廿八日発行 六面

偽作問題に就て―私の執った態度を弁ず―

野口米次郎 一

生残り慰霊祭／冥途への亡者追加  
慶応義塾／パレット・クラブに就いて

張作林 五  
小林猶治郎 五  
奇文堂主人 六

エノケンに与へる言葉

文士の姓名判断

張作林 六  
袋源 齊 六

第二百卅五号 昭和九年七月十二日発行 二面

第二百四十四号 昭和九年十月廿五日発行 八面

第二百卅六号 昭和九年七月廿六日発行 八面

龍子と翠雲の個展

豊田 豊 二

帝展(一)／日本画を評す

豫田 祐介 一

帝展(二)／日本画を評す

豫田 祐介 二

帝展／洋画評(一)

近藤 辰造 二

帝展／洋画評(一)

近藤 辰造 三

弔辞 (高村光雲)

正木 直彦 六

弔辞

川合 玉堂 六

弔辞

和田 英作 六

弔辞

金子堅太郎 六

光雲先生門下生一同 六

四畳半の画室

小林猶治郎 八

第二百四十五号 (欠)

第二百四十六号 昭和九年十一月廿九日発行 六面

帝展日本画の特選作

豊田 豊 三

第二百四十七号 昭和九年十二月十三日発行 四面

第二百四十八号 昭和十年一月三日発行 三十二面

文壇人情美譚／湊加藤松翁味津三君のこと (その一)

城西 尊人 三

珊々会展

豊田 豊 八

出版界の解剖(1)―「文藝春秋」の巻―

夏目 忠夫 六

我邦純粹舞踊と其の将来への希望

堀 英夫 三

第二百四十九号 昭和十年一月廿四日発行 八面

文壇親分子分／菊池寛親分と其一党

友神 鬼入 四

劇評／浜町と大木戸／混成旅団の好一对

Y・Y・S 五

出版界の解剖(2)―「改造社」の巻

夏目 忠夫 六

第二百五十号 昭和十年二月二日発行 四面

第二百五十一号 昭和十年二月九日発行 八面

文壇親分子分／水上中村の貸本

友人 鬼入 四

出版界の解剖(3)『主婦之友』の巻

林 一夫 五

劇評／新劇二座覗き／創作座と俳優学校劇団

Y・Y・O 七

レコード新譜評

韻井 惣夫 八

第二百五十二号 昭和十年二月十六日発行 八面

出版界の解剖(4)経済往来の巻

林 一夫 四

文壇代作秘聞(その一)

柚丹 樗夫 四

文壇親分子分／親分なき早稲田

友神 鬼入 五

劇評／浅草三座巡／出色の梅沢一座

Y・Y・O 七

レコード新譜評

韻井 惣夫 八

第二百五十三号 昭和十年二月二十三日発行 四面

最近画壇所感

豊田 豊 一

訂正

文壇親分子分／親分なき早稲田

斎藤 素巖 二

永田雅一とはどんな男か? その一

友神 鬼入 三

X Y Z 四

第二百五十四号 昭和十年三月二日発行

四面

文壇代作秘聞(その二)

画展二三を観て

出版界の解剖(4)博文館の巻

第二百五十九号 昭和十年四月六日発行

八面

訂正

柚丹 樗夫 二  
豊田 豊 二  
林 一夫 三

出版界の解剖(6)春秋社の巻

文壇初恋秘聞(宇野浩二の巻)

杉浦 翠 三  
平野 止夫 三  
長島 竹夫 四  
X Y Z 五

第二百五十五号 昭和十年三月九日発行

八面

文豪を熱海に送る

文士初恋秘聞(久米正雄の巻)

一記者 一  
Y L L 六

第二百六十号 昭和十年四月十三日発行

四面

嘘—莫彌剣

四月芝居/追善又追善/盛沢山の歌舞伎座

中村 生寄 一  
Y・Y・O 三

第二百五十六号 昭和十年三月十六日発行

四面

第二百五十七号 昭和十年三月二十三日発行

八面

院展試作展を観る

文壇初恋秘聞(細田民樹の巻)

文壇代作秘聞(その三)

劇評/明治の新国劇/出色の試験地獄

豊田 豊 三  
X Y Z 四  
柚丹 樗夫 五  
N G K 七

藝術人展望(一)/左団次の両面

純粹小説に就て/横光利一氏に聴く

出版界の解剖(7)/三笠書房の巻

青々会展を観る(一)

巷の噂

Y・Y・C 一  
X・Y・Z 六  
豊田 豊 八  
M・C・C 八

第二百五十八号 昭和十年三月三十日発行

四面

速水君を憶ふ

作家としての態度

故人の性格と芸術

珠のやうな風格

安田 靱彦 三  
小林 古径 三  
前田 青邨 三

第二百六十二号 昭和十年五月四日発行

四面

青々会展を観る(二)

第二百六十三号 昭和十年五月十八日発行

八面

出版界の解剖(8)/小学館の巻

藝術談義(1)/小説修業は人間完成の一手段—結局書かなくなるために書

X・Y・Z 五

くに過ぎないー／（横光利一氏を訪ふ）

七

第二百六十四号（欠）

第二百六十五号 昭和十年六月一日発行

四面

第二百七十四号 昭和十年八月十日発行  
懇話会賞に就て「明言出来ぬが残念」

八面

巷の噂

豊島与志雄 一

机の塵

Y X Y 二

第二百六十六号 昭和十年六月八日発行

二面

楽屋の雀

声明書 日本美術院、二科会、新帝展不出品同盟、国画会、塊人社、  
京都工芸作家代表、春台美術展覽会有志

八月芝居／前進座を観る／たて方に異議あり

Y・Y・O 七

詰問書

長谷川栄作他

二

第二百七十五号 昭和十年八月十七日発行

八面

一週一人／新劇運動昨今

秋田 雨雀 一

芥川賞／当選雜感

石川 達三 四

当選作を斬るーまづ両者共無難かー

覆面子 四

巷の噂

Y X Y 五

銓衡委員としてー極力排した情実関係ー

佐々木茂索 四

日本画会と新情趣主義

豊田 豊 八

巷の噂

X・Y・Z 五

現代日本画家中堅論（一）／太田聰雨の横顔

鹿子木道雄 六

大鎧と絵巻物

前田 青邨 六

一筆三拝の伝説

林 彌光 六

ワッサアマンの人と其の思想（上）

加藤 信也 六

八月芝居／躍進の新劇座／『春琴抄』を観る

Y・Y・O 七

楽屋雀

P・P・O 七

第二百七十二号 昭和十年七月廿七日発行

六面

巷の噂

M・C・C 二

机の塵

X Y Z 三

第二百七十三号 昭和十年八月三日発行

四面

第二百七十六号 昭和十年八月廿四日発行

八面

一週一人／詩壇への要望

小熊 秀雄 一

巷の噂

所謂「文藝復興」はいつか—文壇時感—

ワッサアマンの人と其の思想(仲)

美術界パトロン銘々伝一

現代日本画家中堅展望(二)／福田豊四郎の心臓

友禪染織考

文壇余白

八月芝居／東劇のぞき／宛然マネキン劇

第二百七十七号、第二百七十八号(欠)  
第二百七十九号 昭和十年九月十四日発行 八面

一週一人／新劇時代来か

北満の旅から(上)

美術史上の新しい見地

アトリエ夜話

巷の噂

絵画藝術と写真藝術(中)

絵馬雑考(二)

文壇余白第四回

今年の二科展／美術時評(2)

第二百八十号 昭和十年九月二十一日発行 八面  
一週一人／兄竹紫を語る

O・K・O 二

武田麟太郎 四

加藤 信也 四

宇羅庭 浦 四

鹿子木道雄 六

岡田三郎助 六

武野 藤介 六

Y・Y・O 七

北満の旅から(下)

藝術家と愛情の問題

武野藤介氏へ一言／曲射砲

大衆文藝と新講談の關係

現代日本画家中堅展望(五)／常岡文亀の画業

美術界パトロン銘々伝四／今村繁三と芝川照吉

絵画藝術と写真藝術のこと(下)

文壇余白第五回

九月芝居／浅草のぞき／新作揃ひの梅沢一座

院展、青龍、明朗展／美術時評(3)

第二百八十一号 昭和十年九月二十八日発行 八面

一週一人／撤回命令に就て／米・女流彫刻家

ガートルード・ボエル 一

神近市子氏の藝術家と愛情の問題

日本の探偵小説

現代日本画家中堅展望(六)／森白甫の素描

雅号の由来

華山と宗紫山(上)

戸塚だより

文藝時評(一)中央公論の「三十四人集」

大部屋の生活問題

文壇余白第六回

大宅 壮一 二

神近 市子 二

大草 実 二

土師 清二 二

鹿子木道雄 三

宇羅庭 浦 五

安成 三郎 六

武野 藤介 六

Y・Y・O 七

豊田 豊 八

窪川鶴次郎 二

江戸川乱歩 二

鹿子木道雄 三

太田 聰雨 三

加藤 信也 三

藤田 嗣治 三

覆 面子 六

松浦泉三郎 六

武野 藤介 六



九月芝居／創作座を観る／『狐舎』に異議あり  
入選・コント／貧しき性根

Y・Y・O 七  
島田 和夫 八

第二百八十二号 昭和十年十月十二日発行 八面

第二部会の態度に就いて

「大衆文学」と「純文学」に区別ありや

中條さんの近状を語る

洋画壇への苦言／二部新会員諸氏の態度を難ず

華山と宋紫山(中)

現代日本画壇中堅展望／岩田正己の風格

雅号の由来

作家訪問記(一)／江戸川氏の横顔

文藝時評(二)

劇評／大一座の木挽町＝呼物は滝口法難

文壇余白／第七回

劇界太平記(一)／松竹・東宝の引拔合戦

美術時評／百穂の遺作展

第二百八十三号 昭和十年十月廿六日発行 八面

一週一人／ト翁の廿五年祭

作家訪問記(二)／松岡映丘氏の昨今

劇界太平記(二)／松竹・東宝引拔合戦

第二部会を評す

秋田 雨雀 一  
一 記者 三  
長崎 町人 五  
河東 三郎 六

劇評／不入の演舞場＝新作上演是か非か

文壇余白第八回

最近のユーモア小説に就て＝批評家の猛省を望む

華山と宋紫山(下)

現代日本画家中堅展望(八)／玉村方久斗の検討

鎌倉の故事

鎌倉札讀

絵の町・鎌倉

鎌倉の夏

第二百八十四号 昭和十年十一月二日発行 二面

第二百八十五号 昭和十年十一月九日発行 八面

文藝懇話会に就いて一言

来朝せるマレシヤルを語る

歌壇現下の諸問題について

第二回展を顧みて＝並に美術批評家への苦言

現代日本画家中堅展望(九)／根上富治の人間性

雅号の由来

顔見世月一巡

作家訪問記(三)／能岡美彦氏の印象

劇界太平記／松竹・東宝引拔合戦(三)

珊々会展を観る

Y・Y・O 六  
武野 藤介 六  
生方 敏郎 七  
加藤 信也 七  
鹿子木道雄 七  
吉川 英治 八  
河村 菊江 八  
藤田 嗣治 八  
水谷八重子 八

島崎 藤村 二  
野村 光一 二  
生田 蝶介 二  
落合 朗風 三  
鹿子木道雄 三  
永田 春水 三  
Y・Y・O 三  
一 記者 五  
長崎 町人 七  
豊田 豊 八

東光会展を評す

河東 三郎 八

第二百八十六号 昭和十年十一月十六日発行 二面

「親」は英雄也／杉山平助氏に  
作家クラブの嘘：曲射砲  
小室先生の御言動について

六字 正名 三  
T 生 三  
横尾 翠田 八

第二百八十七号 昭和十年十一月廿三日発行 八面

横尾君の南画院脱退について

詩人を待遇せよ／「懇話会雑誌」に就て

懇話会を排撃す／プロ作家は協議会を持て

作家訪問記(四)／島崎藤村氏の風格

日本画家の動勢診断(一)／尚文と春水の昨今

劇界太平記／松竹東宝引拔合戦(四)

文壇余白／第九回

小室 翠雲 一  
豊島与志雄 二  
武田麟太郎 二  
一 記者 二  
鹿子木道雄 三  
長崎 町人 三  
武野 藤介 六

第二百八十八号 昭和十年十一月三十日発行 二面

第二百八十九号 昭和十年十二月七日発行 二面

第二百九十号 昭和十年十二月十四日発行 八面  
クラブ流行の暮／独立作家クラブ愈々誕生か？／趣意書二三日中に  
発送

武田麟太郎、徳永直、窪川鶴次郎、湯浅克衛、橋本正一、松田解子  
作家訪問記(五)／藤森成吉氏の全貌  
「青ニ才」について／杉山平助氏に

一 記者 二  
外村 繁 三

第二百九十一号 昭和十一年一月一日発行 三十六面

文藝賞氾濫の功罪／「過多の弊」未だ見えず！

行動主義の欲したこと

大衆文学と持味

新聞小説に就いて

都をどり

ふろふき大根

雑記

舞姫の歳暮／寂しいクリスマス

お姫様のお正月／馬車にのる頃

若き者の場合／「焰の記録」の思ひ出―昨年度改造作当選作の話

年末撮影所日記／徹夜する新進女優の手記―

日本映画監督覚書／小津安二郎／伊丹万作／山中貞雄／成瀬巳喜男／

五所平之助

東都音楽学校総まくり／東京音楽学校／日本音楽学校／東洋音楽学校／

東京高等音楽学院／帝国音楽学校／武蔵音楽学校／中央音楽学校

東京高等音楽学院／帝国音楽学校／武蔵音楽学校／中央音楽学校

東京高等音楽学院／帝国音楽学校／武蔵音楽学校／中央音楽学校

東京高等音楽学院／帝国音楽学校／武蔵音楽学校／中央音楽学校

寿老人 一八〇元

榊山 潤 八〇九

津軽照子 二〇二

湯浅 克衛 二

石井美笑子 二

日活

今村 太平 二

宮城 道雄 八

前田 夕暮 八

矢崎 弾 七

長田 幹彦 六

小松 清 六〇七

現代人気挿絵画家検討／岩田専太郎／山口將吉郎／小田富彌／小村雪岳  
／木村莊八／河野通勢／石井鶴三  
豊島 烈 元

第二百九十二号 昭和十一年一月十八日発行 四面

第二百九十三号 昭和十一年一月二十五日発行 八面  
現代人気挿絵画家検討／樺島勝一氏／田中良氏／林唯一氏／東郷青児氏  
／小池巖氏  
豊島 烈 七

第二百九十五号 昭和十一年二月二十二日発行 八面

日本の映画界は文藝映画製作に尙早  
最近の感想／モデルに就て  
現代画壇／作家の輪廓―水上泰生―  
俳優の一面(一)／大河内伝次郎  
新築地の渡辺華山を評す  
島崎 藤村 一  
尾崎 士郎 二  
鹿子木道雄 三  
春 珠 菴 六  
啓 里 軒 七

第二百九十六号 昭和十一年二月二十九日発行 十面

小品の持つ精神―個展に際して―  
懇話会の目的は何か／文藝統制などは論外／単に自由な気持の会／  
懇話会の正体を訊く  
藤田 嗣治 一  
豊島興志雄 二

『野鴨』公演に際して  
日本新劇の歴史を語る  
處女演出の前に

薄田 研二 三  
丸山 定夫 三

白井喬二出世秘話…文壇に出るまで

俳優の一面(二)／片岡千恵蔵と阪東妻三郎  
巷の噂  
X・Y・Z 六  
春 珠 菴 七  
A・B・C 九

第二百九十七号(欠)

第二百九十八号 昭和十一年三月十四日発行 六面

脱退者は斯く語る

全く自由な立場から新しい道を拓きたい

純粹に絵画の研究に没頭したいのが目的

飛弾山峽青嵐―個展に際して―

新劇不振の検討／劇場をして観客のクラブたらしめよ

原作にまけた『野鴨』□演

第二百九十九号 昭和十一年三月二十一日発行 八面

デッサンの興味

新劇と新しい舞台―(二)―

懇話会の会員へ―併せてクラブへの寸感―

俳優の一面(三)―嵐寛寿郎と夏川静江

楽壇展望(一)山田耕作と中山晋平

音楽週評

猪熊弦一郎 一  
村山 知義 二  
藤森 成吉 三  
春 珠 菴 四  
城北 奇人 五  
杉 一郎 六

第三百号 昭和十一年三月二十八日発行

八面

新帝展は何処へ行く／改組か解消か現状維持か？／第一回展の不成績

は当然／再改組して名実を備へよ  
純粹文学の進出―問題ある文壇―

三月の創作座

個展に際して

新劇と新しい舞台―(二)―

兎の耳

巷の噂

音楽週評

映画週評―最近日本映画企劃の傾向

第三百一号 昭和十一年四月十一日発行 四面

新帝展は何処へ行く／改組か解消か現状維持か？／不成績は当局の責に非ず／鑑査制度も現状にて可なり

スターの前身を探る／入江たか子と鈴木伝明

小室 翠雲 一

本庄 陸男 二

與野 武一 二

児島善三郎 三

村山 知義 三

P・X・P 四

S・S・S 六

杉 一郎 六

楠木 鷹彦 七

石井 柏亭 一

頼 来 軒 三

第三百二号 昭和十一年四月十八日発行 八面

新帝展は何処へ行く／改組か解消か現状維持か？／開催は望むも不開催亦可なり／旧無鑑査の復帰は問題の外

松木学氏に訊ねて疑義を解く／文藝懇話会は何をするか

本紙 記者 二

上司 小剣 二

純粹文学の進出(二)―問題のある文壇―

新劇と新しい舞台(三)

村山 知義 三

ムウラン・ルウジュ一四五回公演  
俳優の一面：四：栗島すみ子

海井 行一 三  
春 珠 菴 七

第三百三号 昭和十一年四月二十五日発行 四面

改組か解消か現状維持か？／新帝展は何処へ行く／一度白紙に還れ！  
／当局及現状支持会員の猛省を促す

藤島 武一 一

第三百四号 昭和十一年五月二日発行 八面

改組か解消か現状維持か？／新帝展は何処へ行く／美術をして日本精神に還せ／帝展問題の根本的解決策

純粹文学の進出(三)―問題のある文壇―

満州国唯一の唄手／李勝和君

荒木 十畝 一  
本庄 陸男 二  
青山倭文 二 五

第三百五号(欠)

第三百六号 昭和十一年五月十六日発行 八面

スターの前身を探る／田中絹代・川崎弘子・市川春代の巻

頼来軒主人 五

第三百七号 昭和十一年五月二十三日発行 二面

第三百八号 昭和十一年五月三十日発行 八面

改組か解消か現状維持か？／新帝展は何処へ行く／天邪鬼的行動を反省し／美術家の本質を三思せよ

和田 三造 一

今ぞ革新の秋

人間が描けてない―新協劇団の「天佑丸」―

堂々所信を披瀝／栖鳳畫伯の建白書／美術界の帰趨を明示す

楽壇展望(二)／宮城道雄―町田嘉章

作家の印象

伝書鳩

小室 翠雲 一

與野 武一 二

竹内 栖鳳 二

城北 奇人 三

夏野 夏五

K O K 七

第三百九号 昭和十一年六月六日発行

四面

新人に任せ情弊を匡救

散会后／各会員は語る

／横山大観画伯／小室翠雲画伯／岡田三郎助画伯／石井柏亭画伯

稍安堵の平生文相

栖鳳 画伯 一

竹内栖鳳画伯

平生文相談 二

第三百十号 昭和十一年六月十三日発行

八面

『わしは素人』

指導精神を示せ

選後の感(第一美術展)

四行会の生誕を祝って

四行会第一回展評

清水院長談 一

小室翠雲画伯談 一

佐藤哲三郎 四

難波田龍起 四

佐波 甫五

第三百十一号 昭和十一年六月二十日発行 二面

第三百十二号(欠)

第三百十三号 昭和十一年七月四日発行

八面

文藝会館・其他

兎の耳

巷の塵

無凡山莊主人 二

R・O・R 三

P・C・L 五

第三百十四号 昭和十一年七月十一日発行

十面

既成作家勇退論

旅中の憂鬱―画室の窓から

楽壇展望(二)／古賀政男―佐々紅華

スターの前身を探る／伏見直江 高田稔

無凡山莊主人 二

藤田 嗣治 三

城北 奇人 四

頼来軒主人 七

第三百十五号(第三百十八号(欠))  
第三百十九号 昭和十一年八月二十二日発行

八面

直木賞・芥川賞―近頃文壇噂の聞書―

ゴリキイ追悼公演について

一泊写生旅行―画室の窓から

私のアトリエ訪問記(三)／中川一政画伯の巻

北海道の風光を愛でつゝ／層雲峽・谿谷美

無凡山莊主人 二

秋田 雨雀 三

大智 勝観 三

夏山 繁四

望月 春江 五

第三百二十号 昭和十一年九月二日発行

八面

第三百二十一号 第三百三十四号(欠)  
第三百三十五号 昭和十二年一月一日発行 三十二面

年頭の所感 〓 暫間批評家俳撃 〓

出版と文化指導

風(デッサン)

国立劇場建設問題に特に希望すること

新春雑感

文学の精神を守ること

主線美術展に就て

新春特輯読物/文壇デヴィュー物語

懸賞小説裏面史—近頃文壇コンニャク話—

第三百三十六号 昭和十二年一月十六日発行

四面

藤島 武二	一
山本 実彦	六
内田 巖	六
岡本 綺堂	七
石井 柏亭	八
本庄 陸男	九
佐波 甫	九
豊島 豊	五
無凡山莊主人	六

第三百三十七号 昭和十二年一月廿三日発行

八面

是か? 非か? 果然問題となつたジイドの豹変振り/真実の眼に映る  
人間文化/旅行記に付諸家の説を聴く

もっと深く研究してかゝれ

いかにもジイドらしい

プラウダの反ばくは意外だ

文学者顯彰

散文精神排撃

松田 解子	二
窪川 稲子	二
貴司 山治	二
壬生 孝	二
小熊 秀雄	三

佛画を描く若き人へ

木村 武山 三

第三百三十八号 昭和十二年一月三十日発行 六面

文藝作品オリムピックに就て/疑問だと思ひます

長老閑話(1)/若い作家のために—私と文藝懇話会に就て—

示数盤/統制と独善主義

文壇隨想/こんどの懇話会賞その他

文藝時評/プーシキン百年祭に際して

新劇運動のために/本年の要望と抱負

巷の噂

映画時評/新しき土を評す(下)

近松 秋江	二
小宮 喬	二
武田麟太郎	二
野川 隆	三
山本 安英	三
秋田 雨雀	三
L・C・P	三
吉田曉一郎	五

第三百三十九号 昭和十二年二月二十日発行 八面

文化建設者の精神

大衆の「大学」 〓 演劇本来の職分を果さしめよ

示数盤/民間文学者の気魄

画家と仕事

バチカノ宮殿

花園天皇御肖像

文学顯彰是々非々/諸家・各紙の談議を評す

秋田 雨雀	一
中村 吉蔵	二
壬生 孝	二
藤田 嗣治	三
中沢 弘光	三
坂口 一草	三
小宮 喬	三

第三百四十号 昭和十二年二月二十七日発行 八面

直木賞の受賞者ニ木々高太郎君の藝術

画壇の憂鬱

示数盤／批評の依存性

テンペラ画の特質

文藝時評／破り難き「創作」の殻／秋声、房雄、卓、有為男の作

名匠寸描／安田靫彦画伯

制作余談

テンペラ画の特質

藝術家と団体

巷の噂

制作余談

テンペラ画の特質

藝術家と団体

巷の噂

第三百四十二号 昭和十二年三月十三日発行 八面

画壇近事

示数盤／直観と理論構成

制作余談

若き天才佐伯祐三遺作展／待望裡に十四日より開催

一つのエピソード

棄身の美しさ

佐伯の勝利の確證

大下宇陀児 二

K Y M 生 二

小宮 喬 二

平沢 大暲 三

壬生 孝 三

春日 桜子 六

木村 武山 一

平沢 大暲 二

日名子実三 二

S・P・S 三

藤島 武二 二

壬生 孝 二

木村 武山 二

久米 正雄 三

武者小路実篤 三

里見 勝蔵 三

奔放而も緻密

靈感の壮烈さ

佐伯君の場合

独自の近代味

もし健在なら

藝術の誘惑

実在のバリ

やみ難き情熱—佐伯祐三遺作蒐集に就て

第三百四十三号 昭和十二年三月二十日発行 四面

示数盤／「長篇小説」の道

永遠に世に問ふ—佐伯祐三遺作展に就て(承前)

第三百四十四号 昭和十二年三月廿七日発行 八面

次のペン大会

示数盤／批評家の解剖

十字園

噂の噂

記録板

巷の噂

第三百四十五号 昭和十二年四月三日発行 四面

巷の噂

G・G・G 三

中山 巍 三

中河 興一 三

伊藤 廉 三

荒城 季夫 三

林 武 三

曾宮 一念 三

横光 利一 三

山本発次郎 三

小宮 喬 二

山本発次郎 二

島崎 藤村 二

壬生 孝 二

P・C・L 三

O・P・Q 五

R・R・R 七

久米 正雄 三

武者小路実篤 三

里見 勝蔵 三

G・G・G 三

中山 巍 三

中河 興一 三

伊藤 廉 三

荒城 季夫 三

林 武 三

曾宮 一念 三

横光 利一 三

山本発次郎 三

小宮 喬 二

山本発次郎 二

島崎 藤村 二

壬生 孝 二

第三百四十六号 昭和十二年四月十日発行

四面

第三百四十七号 昭和十二年四月十七日発行

二面

第三百四十八号 昭和十二年四月二十四日発行

八面

金山平三画伯に訊く

大空 平原 二

示数盤／改造の小説

小宮 喬 二

名画異聞／コランの直話

高木 背水 二

第三百四十九号 昭和十二年五月八日発行

二面

第三百五十号 昭和十二年五月十五日発行

十二面

第三百五十一号 昭和十二年五月二十二日発行

四面

新日本画の目標／大日美術院開催に際して

青木 大乘 一

奈良の思ひ出

高木 背水 二

第三百五十二号 昭和十二年五月二十九日発行

十二面

次代者の言葉／薔薇合戦の抱負

丹羽 文雄 六

藝術新聞に寄す

福士幸次郎 六

児童取材の文学

坪田 譲治 七

身辺抄

高橋 丈雄 七

時の人／山下新太郎画伯

春日 桜子 三

第三百五十三号 昭和十二年六月五日発行 十三面

文藝雑誌主宰者の言葉(一)／文藝首都の五年

保高 徳蔵 六

箱田だより

木村 武山 六

ろじ  
衞衛にて

小田 嶽夫 七

近況陳弁語

福士幸次郎 七

第三百五十四号 昭和十二年六月十二日発行 十三面

文藝雑誌主宰者の言葉(二)／『早稲田文学』に就て

谷崎 精二 二

次代者の言葉／せめて執拗たれ

外村 繁 二

短篇小説／詩集『曼陀羅』

尾崎 一雄 三

印度の上流婦人

荒井 寛方 五

民衆への疑義——人民文庫と浪曼派の討論

小宮 喬 七

巷の噂

P・A・P 九

第三百五十五号 昭和十二年六月十九日発行 十三面

新団体の結成——南画聯盟と白閃社の合同問題

小室 翠雲 二

文藝時評／モラルの限界／伊藤整氏の「鏡の中」他一篇

小宮 喬 二

文藝雑誌主宰者の言葉／文藝雑誌の綜合雑誌化について——作品の話

小野 松二 三

落款に就て——諸家の説を訊く

西沢 笛畝 五

高島屋の場合



問題ではない

驚嘆すべき徳義

新刊小説月旦(一) / 「悪童」に就いて

出版界に特異な稚氣と高邁菊池氏の人柄

短篇小説 / 隣人

再建の祭禁

印度石窟寺院の壁画—アジアンダー寺院の巻—

出版時評 / 如何に打開するか / 新刊本と読者の開拓

第三百五十六号 昭和十二年七月三日発行 十二面

内鮮融和と人形藝術

文藝雜誌主宰者の言葉(二) / 『野火』の野望

次代者の言葉 / 無抱負

陶藝の醍醐味

文藝時感 / 文学の認識 / 藝術院と藤村・白鳥の辞退

出版時報 / ヒット『近衛伝』 / 十銭本の解剖 / 所謂パンフレット問題

印度石窟寺院の壁画(二)

巷の噂

短篇小説 / 深夜

『悪童』に就いて(承前)

小説の功利性—広津和郎氏の説につき

誇張に過ぎた演出 / 創作座の「町人」を観る

松岡 映丘 五

小室 翠雲 五

青柳 優 六

忠 夫 寄 六

湯浅 克衛 七

後藤 兵衛 七

荒井 寛方 八

夏 目 寄 八

西沢 笛畝 二

水守亀之助 三

新田 潤 三

大森 光彦 六

後藤 兵衛 七

並 木 寄 七

荒井 寛方 七

P・A・P 八

中村 地平 三

青柳 優 三

小宮 喬 三

煩 彦 三

第三百五十七号 昭和十二年七月十日発行

八面

魅惑された熱河—滿洲旅行より帰りにて

印度石窟寺院の壁画(三)

小説の面白さ—高見順氏の作品と批評—

『兵隊さん』その儘の姿でスキーと山を語る小杉放庵氏訪問(一)

短篇小説 / 町にて

第三百五十八号 昭和十二年七月十七日発行

八面

小説と教養—藤村成吉氏の「路傍の石」観

早苗会の華形勝田哲第一回個展

見付けた! 兵隊シャツの翳に藝術家のデリカ / 山を語る放庵氏(二)

公園になる漱石山房行 / 故文豪の書齋訪問

名刺綺譚

短篇小説 / 女の寸志

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

H 五

愚 白 記 四

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

伊藤永之介 八

川端 龍子 二

荒井 寛方 二

小宮 喬 三

H 記 五

伊藤永之介 八

小宮 喬 三

愚 白 記 四

H 五

O 生 六

P A P 七

武野 藤介 八

P A P 七

O 生 六

示数盤／新日本文化の会―実がともなふや否や  
昭和の方丈記―永井荷風氏の「西瓜」

文藝時評／遁走譜など／時代性の悲しみ

新刊紹介／時代の代表的女性リシュエンヌ

「暢気眼鏡」と作者―芥川賞受賞作の特質

神泉氏を陣頭に竹立会第一回展

森田書房の背後に正力・高木の二氏／出版解剖

税金珍争議

短篇小説／不安の日

(P) 二

壬生 孝三

後藤 兵衛三

喬 三

(O) 四

愚白 記四

並木 寄六

A P P 七

竹森 一男八

第三百六十一号 昭和十二年八月七日発行

八面

新文展と審査員

鷹・其他

批評と行動―亀井氏の文学党派論

短篇小説／兼光氏の肖像

正木 直彦二

森 白甫三

小宮 喬三

那珂 孝平八

第三百六十二号 昭和十二年八月十四日発行

四面

軽井沢にて

荒井 寛方一

第三百六十三号 昭和十二年八月二十一日発行

八面

夏日所感

私の所懐―人形研究所拡張計画に当って

翻訳家協会の憤激爆発／堀口現理事を不信任

鎗木 清方二

西沢 笛畝二

武久 勝彦三

作家とポーズ／大鹿、佐藤、津田、諸氏の作

犬・馬・壁画：根上富治氏訪問記（二）

山下画伯の愛国熱／犬儒派を一蹴す

雑誌に奔命／立野信之氏

無名時代の昔を／今に戒む湊邦三氏

短篇小説／黄昏の恋

小宮 喬三

H 五

勝生 寄六

仁木 寄六

華生 寄六

佐々 三雄八

第三百六十四号 昭和十二年八月二十八日発行

八面

白首船

戦争と文学／前線文庫其の他

制作・病氣・郷里

小説の映画化に就て

興津より

モラルを疑ふ 第一書房

新居を愉しみ／句作の小閑も持つ／俳画中の人酒井三良氏訪問

短篇小説／やりにくい話

加納 三楽二

(Q) 二

常岡 文亀二

坪田 讓治三

小林猶治郎三

長谷川己之吉三

H 五

十和田 操八

第三百六十五号 昭和十二年九月四日発行

四面

第三百六十六号／第三百六十七号（欠）

第三百六十八号 昭和十二年十月十六日発行

京都市展と新文展

八面

豊田 豊二

別府の天然砂湯

中沢 弘光 三

銀座展覧会風景―現代洋画家を瞥見す―

高橋 丈雄 四

長谷川氏の抗議に答へる

新庄 嘉章 五

文藝時評／改造の二作／藤森氏の衰弱

後藤 兵衛 五

美事に真似た／偽筆栖翁の色紙に

K・T 寄 六

短篇小説／予言者

浜野健三郎 八

第三百六十九号 昭和十二年十月二十三日発行

四面

日名子文書・其他

日名子実三 一

京都市展と新文展

豊田 豊 二

銀座展覧会風景(前承)―現在洋画家を瞥見

高橋 丈雄 二

写真の過失―新築地の「土」を観る

(煩彦) 三

第三百七十号(欠) 第三百七十一号

第三百七十二号 昭和十二年十一月二十七日発行

八面

短篇小説／ある離別

早枝田泉二 八

(原稿受理 一九八九年九月七日)